

“横並び型アクションリサーチ（私はこう思うけど、あなたは？）”

母親発！「今子育てしている私の気持ち」アンケート結果報告

独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業

子育ての苦労は子育てにあらず！？ - 母親たちが気づいた深いこと -

～「みんなで子育て」に向かって～

2009年3月 NPO 法人 彩の子ネットワーク 母親アンケート実行委員会

活動の中心は、乳幼児の母親たち

乳幼児を持つ母親たちが中心になり、昨年8月よりアンケート作成・配布し、2000件以上の回答が集った。分析のためのデータ入力から、分析、話し合い、すべてを子育ての一番の当事者である母親たちが、“横並び”の関係で、一緒に悩み考えながら進めてきた。

“横並び型アクションリサーチ”とは

アンケート方式の社会調査の一つで、調査結果だけでなく、質問を作ること自体が重要な活動。これまでアンケートの対象者とされていた人たちが、普段の生活の中で思っていることをそのまま言葉にし、「私はこう思うけど、あなたは？」と、横並びの関係で対話していく中から質問を作成。更にその結果をもとに対話を重ねる中で、これからの子育てやそれぞれの生き方を考え支えあっていくためのアンケート&ネットワーク活動。

子どもたちを傍らで遊ばせながら、また時にはボランティアの方に保育を頼んで話し合いを進めた。自宅では、子どもが寝付いた夜に作業するなど、それぞれの生活の中で進めてきた。

いろんな立場の人の思いを考えたり、普段は言えない自分の気持ち言葉にすることで、初めて自分の気持ちに気がついたり、だからこそ戸惑ったり…。

生活の中でこうした活動の時間が増えるに従って、夫から「母親たちの愚痴大会でしょ、子どもをそんなことに付き合せて」と言われてしまうメンバーもいた。

アンケート内容に偏りが無いよう質問文を考えるのに時間がかかり、何度も話し合いを重ねた。

アンケート配布は機縁法で、彩の子ネットワークのネットワークを使って、県内の子育てサークル・ネットワークと子育て支援センターの協力を得て配布する他、自分たちの家

族、親戚、知人を伝手に回答を頼んでいった。回答する質問数が多くて記入が大変だと予測していたが、新聞に掲載し実行委員会への参加を呼びかけたこともあり、よりたくさんの人にアンケートを受け取ってもらうことができた。

アンケートが戻ってきて、データの集計・分析も母親たちで進めた。パソコン作業経験の程度はそれぞれ違うけど、知識と知恵を出し合うことで、勉強にもなった。

そして、いよいよ、結果が見えてきた。

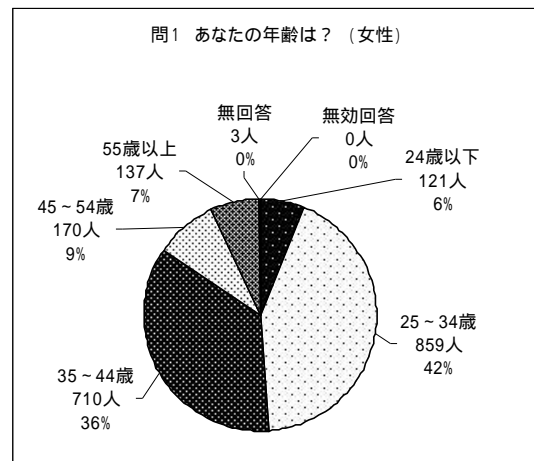
アンケートの回収率

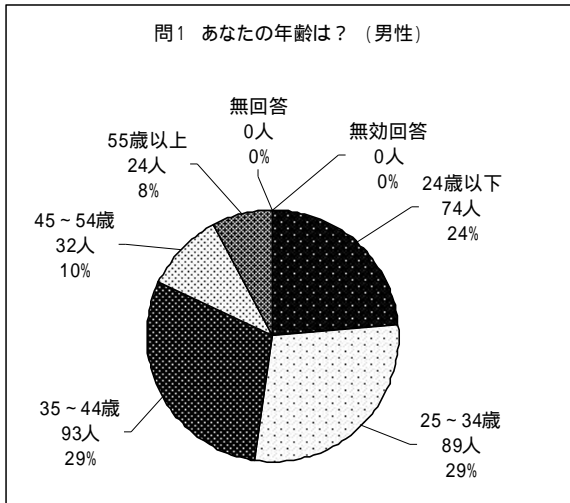
2009年2月末現在、アンケートの配布数は4292通、回収数は、2629通。ここでは、分析スケジュールにより、女性の有効な回答が2000件に達した時点で、分析を始めた。男女含め2312通について、分析を進めた結果を報告する。

- 回収率:61.2% (回収数 / 配布数)
- 有効回答率:87.9% (有効回答数 / 回収数)

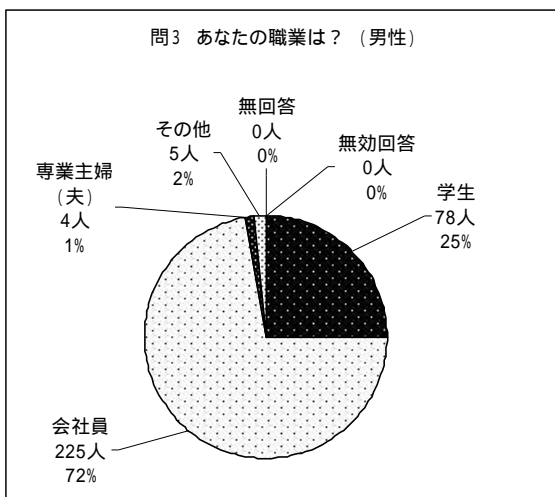
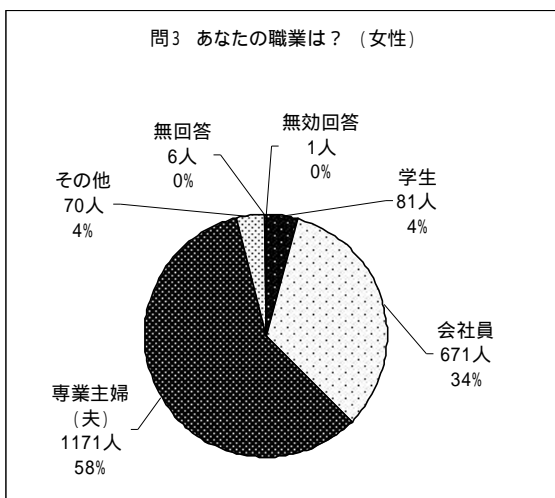
アンケート回答者の内訳（設問A）

女性2000件、男性312件を有効回答として分析する。年齢区分で最も多かったのは、女性が25歳～34歳(859人)、男性が35歳～44歳(93人)、次いで多いのは、女性が35歳～44歳(710人)、男性が25歳～34歳(89人)。子育て年代が最も多いと言える。(別添 グラフ1、2参照)





職業別の割合を見ると、女性は「専業主婦」(1171人)が最も多く、次いで「会社員」(671人)。男性は「会社員」(225人)が最も多い。



子どもの有無をみると、女性で子どもが「いる」のは1801人で女性全体の90%。男性で子どもが「いる」のは214人で男性全体の69%だった。女性で子どもが「いる」と答えた中で、一人目の子どもの年齢が12歳以下の人数は1418人で、女性全体の71%にあたる。

子どもイメージに対する違い（設問B）

女性と男性を比べると、女性の方が、子どもに対し多くのイメージを持っている。（グラフ3参照）

一番回答が多かったのは、男性も女性も「かわいい」。その次は、「元気」「面白い」「好奇心」「いやされる」。上位5位までは男性と女性と同じ順位。

男女の差が一番顕著なのは、「待たなし」。

女性の方が男性より、15.4%肯定回答が多い。

それってどういうことだろう。子どもに対応することは「待たなし」なんだよなっていう実感を女性の方が男性より持っている。それだけ、女性の方が子どもに対応している。子育てを担っている。子どもは待てないことを知っている、ということではないかと話し合った。子どもを理解するうえでのキーワードになるだろう。

男性が女性より回答が多い項目は、「よく泣く」「危なっかしい」「わがまま」「生意気」「飽きっぽい」「半人前」「後継ぎ」「投資」。

6番目に男性の回答が多い項目は「危なっかしい」。

男性は47.4%、女性は43.0%と、男性が女性より若干高い割合で回答している。

7番目に男性回答が多いのは「よく泣く」。

男性44.2%、女性43.5%と男性の方が若干高い割合で回答している。

女性の6位、7位は、「素直」「手がかかる」。

女性の回答を因子分析してみる

< 因子分析とは >

回答の傾向から、質問をいくつかのグループに分ける手法で、意識調査では一般的な分析方法。

ここでは、主因子法を用いて、分けられたグループそれぞれの中に潜む共通した何か(因子)を探る。

因子の意味するところを言葉にし(ラベル付け)、各因子の意味や因子同士の関係から、ばらばらに見えた質問群を構造的に捉えなおすことができる。

子どもイメージについては、6つの因子に分かれた。それらにラベルを付けた。（別添 グラフ4 参照）

第1因子 子どものチカラ

第2因子 子どものここがイヤ

第3因子 子育ての大変

第4因子 やっぱりかわいい

第5因子 見返り期待

第6因子 元気

第1因子「子どものチカラ」を選ぶ人は、他のすべての因子を選ぶ傾向がある。

第2因子「子どものここがイヤ」と、第3因子「子育ての大変」が、最も関係が強く、「子どものここがイヤ」と思う人は「子育ての大変」も感じやすい。

女性に比べて男性が選びやすいものは、第5因子「見返り期待」の質問すべてと、第2因子「子どものここがイヤ」のいくつかの質問「生意気」「わがまま」「飽きっぽい」「残酷」。

第3因子「子育ての大変」の3つの質問の中では、「危なっかしい」は男性の方が女性より肯定回答の割合が高く「手がかかる」は女性の方が高い。

分析の話し合いでの意見

「夫は、子どものちょっとした行動に『危ない』ということが多く、自分がそれに対応しなくてはならなくなる。それって、夫を通して子どもに対してやるが増えてしまう。夫に手がかかるのと同じだなって思う」という意見があり、他のメンバーの多くがうなずいていた。

妊娠・出産について（設問C）

男女とも最も「大いにそう思う」が多かったのは

「17.自分だけががんばったのではなく、子どもと一緒に頑張って生まれたのだ」・女性 74.2%、男性 57.7%

因子分析の結果から

因子分析の結果、妊娠・出産についての気持ちに8つのタイプ(因子)があることが見えてきた。

第1因子 妊娠・出産に主体的

第2因子 妊娠・出産を素直に喜べない

第3因子 当然と思われていること

第4因子 出産がゴール

第5因子 自分で決めたい

第6因子 自然分娩神話

第7因子 怖くなく出産したい

第8因子 子どもの障害は自分の責任

女性と男性で比較してみる

(別添 グラフ5 参照)

第1因子「妊娠出産に主体的」は女性のポイントが高い。

第3因子「当然と思われること」は男女差がない。

第2因子「妊娠出産を素直に喜べない」第6因子「自然分娩神話」、第7因子「怖くなく出産したい」は男性のほうが高い。

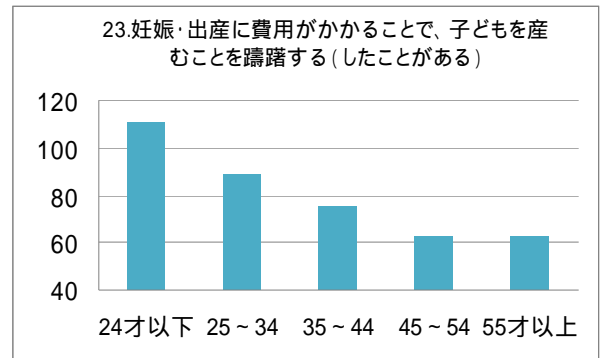
第2因子「妊娠出産を素直に喜べない」は概ね男性が高いが、「18-男性は妻(パートナー)の出産より、仕事のほうが優先だ」のみ男女差がない。

女性の世代間での比較をみてる

(別添 グラフ6 参照)

世代間で差(バラつき)があるのは、

・第2因子「23-妊娠・出産に費用がかかることで、子どもを産むことを躊躇する(したことがある)」(年代が若いほど高い)



世代間で差がないものは、

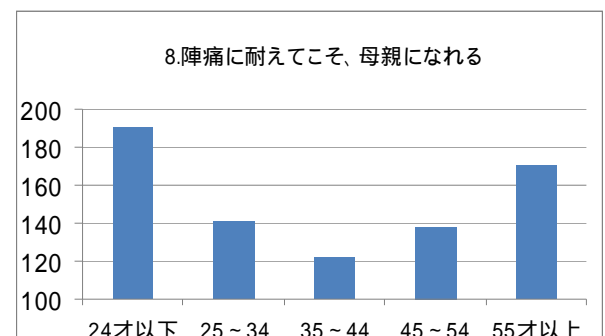
・第1因子「13-好きな相手から求められても、セックスしたくない時はノーといえる」

若い世代と年配の世代のポイントが高いもの

・第6因子「8-陣痛に耐えてこそ、母親になれる」

・第6因子「3-自然分娩できなければ、スタートから挫折した気持ちになる」

・第7因子「14-出産するところは、万が一に備えて、総合病院など医療設備が整っているところがいい」



若い世代だけがポイントが高いところ

・第1因子「7-お腹が大きくなるのが恥ずかしくて隠したい気持ちになる」24歳以下が高い

・第5因子「15-自分がリラックスできる体位や場所で出産したい」24歳以下が高い

・第7因子「2-リスクが予想されても、自分が痛くないこと(無痛分娩)が優先される」24歳以下が高い

みんなで話したこと

・「17.自分だけががんばったのではなく、子どもと一緒に頑張って生まれたのだ」は男女とも最も「大いにそう思う」が多かった(女性 74.2%、男性 57.7%)。子どもの人権にも触れる質問で、肯定率が男女とも高いのは嬉しい結果だといえる。だが、現実の社会では、出産のときに自ら生まれようとする力を持つ赤ちゃんたちなのだということを本当には理解されていないために、赤ちゃんが何もできないお世話されるだけの存在として捉えられやすいのではないか。また、出産の現場でも、赤ちゃんが『どうがんばっているのか』説明されないまま、符丁のように「赤ちゃんもがんばってるのよ」と聞かされ、「世間的にそういうもの」というところで肯定しやすい価値観の質問ともいえる。

・一番男女差が大きいのは、「13-好きな相手から求められても、セックスしたくない時はノーといえる」女性が男性より高く、性に対して主体的に生きたい女性の姿が見えるが、しかし、それに対して、「9-避妊を話し合える関係があつてこそ、セックスを楽しむる」について強く肯定している女性は、「13-好きな相手から求められても…」の設問と比べて低くなっており、かつ、男女差が縮まる結果となっているところを見ると、「ノーといえる」イコール「自分も、パートナーも、大切にすること、子どもが生まれたならば、自分の子どもとして引き受ける(望まれて生まれる)」ということではないのかもしれない。話し合いでは、意に沿わないセックスによる望まない妊娠、その結果としての中絶が20～30歳前半に多いのも、女性の意思が尊重されていない結果かもしれないと話した。また、この質問は世代間で差がなく、全体的に高いことから、各世代における理由は様々としても、セックスレスの時代が背景にあるのではないだろうか。特に、若い世代では情報消費社会の中で1対1のやり取りを回避するところでの「ノーといえる」なのかもしれない。それに対して、同じ第1因子の「9-避妊を話し合える関係…」については世代間のバラつきがあり、若い世代から順にポイントが低くなっていることから、「ノーといえる」理由が年配の世代にとっては、明確に「自分の意思を尊重する」ことなのではなく、パートナーに対しての拒絶や諦め、また、閉経した女性の場合終わったこととして回答されているのかもしれないと話した。

・若い世代と年配の世代の価値観が似ている第6因子「8-陣痛に耐えてこそ、母親になれる」、第6因子「3-自然分娩できなければ、スタートから挫折した気持ちになる」、第七因子「出産するところは、万が一に備えて、総合病院など医療設備が整っているところがいい」は、男女差では男性の

ポイントが高い。若い世代、年配の世代、男性の価値観は似ていることがわかる。このことから、若い世代及び男性のほうが、古い価値観に縛られている傾向がうかがえる。

男性は、「23-妊娠・出産に費用がかかることで、子どもを産むことを躊躇する(したことがある)」も高い。どちらかという、夫の役割としての経済的な面に関心が向いている。しかし、「18-男性は妻(パートナー)の出産より、仕事のほうが優先だ」に、男女差がないことから、女性も、それを当然の事として受け入れざるを得ない現実がある。そして、それは、子育ての中でも見られる。

・男性は第6因子「自然分娩神話」のポイントが高いのに対して第7因子「怖くなく出産したい」に対してもポイントが高い。自分が出産の痛みを経験することを考えると、男性は、「自分が痛くないこと」を優先させている。妻・パートナーには「陣痛に耐えてこそ」と言っておきながら、「リスクより痛くないことが優先」といっている。これらの質問群は世代別で見ると、24歳以下の若い世代と、年配の世代も男性と同じような価値観を持っていることがわかる。前回のアンケートでも、同様の結果を得ているが、若い世代及び男性のほうが、古い価値観に縛られている傾向がうかがえる。

・第2因子「23-妊娠・出産に費用がかかることで、子どもを産むことを躊躇する(したことがある)」については、若い世代にいくほどポイントが高く、男女差では男性が高い。これは、現在の不況による経済状況や、貧困に抛る教育格差を反映するものと思われ、子どもを生み育てにくい時代ということが伺える。

子育て・生き方について(設問D)

因子分析の結果、60の質問から、私たちの中に8つの顔^{タイプ}があることが見えてきた。

第1因子 みんなで子育て

第2因子 育児の悪循環

第3因子 自分らしく生きたい

第4因子 今どきの子育て

第5因子 一人で背負う子育て

第6因子 体罰容認

第7因子 パートナーへの不満と諦め

第8因子 子どもの存在が嬉しい

これは、アンケート回答者たちが8つのタイプ(因子)に分かれるということではなく、一人ひとりが、強弱があるにしろ、その8つを持ち得ているということでもある。中には一つの

因子に偏って生きている人もいます。因子同士には、関係の深いものや、反する関係のものなどがある。

因子分析結果から、第1因子「みんなで子育て」は、

- 多くの人肯定していて、みんなが望んでいること
- 第3因子「自分らしく生きたい」と第8因子「子どもの存在が嬉しい」に相関
- 第5因子「一人で背負う子育て」に反相関

という特徴がある。

女性と男性で比較してみる

(別添 グラフ7 参照)

回答を得点化した女性と男性の比較を見ると、全体的に女性の得点が男性よりも高い。その差が目立つ質問は、

- 58-つらいときは赤ちゃんと一緒に泣いてもいい
- 4-ひとりでゆっくり食事をして、トイレに入って、お風呂に入りたい
- 15-仕事をしているときは、子どもや家族から開放される貴重な時間だ (最も差が大きい)
- 37-子どもの泣きやぐずりには、父親はつきあいきれないと思う
- 17-自分の人生を大切に生きようと思ったら、離婚も時には選択肢のひとつになる

である。「4 ひとりでゆっくり食事をして、トイレに入って、お風呂に入りたい」「15-仕事をしているときは、子どもや家族から開放される貴重な時間だ」の得点が女性の方が高いのは、家事や子どもの世話に多くの時間を費やさざるを得ない現実の中、自分の時間が欲しい、という実感を男性よりも強く感じていると思える。

他の差が目立つ質問については、その差の意味を探る話し合いをする余地がある。

全体的に女性の方が得点が高い中、第6因子「体罰容認」は男性の方が高い傾向がある。これは、男性(父親)が、子どもやその母親に対して厳しく、結果として追い詰める要因となり得るのではないかと。そこには、根強い男尊女卑や性的役割分業といった構図が見える。

第5因子「一人で背負う子育て」は差が少ない。

女性の年代比較をみってみる

(別添 グラフ8 参照)

年代で差が最も目立つ因子は、第4因子「今どきの子育て」。

若い世代が高く、年配世代が低いという傾向がある。

次いで、第3因子「自分らしく生きたい」が年代間で差が目立つが、質問によっては、差の無いものもあり、一概に若い世代が高く、年配世代が低いとはいえない。質問一つ一つ丁

寧に見る必要がありそうだ。現時点ではそこまで話し合いきれていない。

全年代で得点が接近している質問よりも、差のある質問の方が多い。これだけ差があるということは、年代間で考え方のすれ違いや衝突が起こるのも当然といえる。だから、どうすると良いのか、年代を問わずみんなで一緒にみつめていきたい。

第1因子「みんなで子育て」に注目

(別添 グラフ9 参照)

この因子は、一人ひとりを尊重し、子どもも自分も周囲もすべてを受け止めて、みんなで子育てしようという気持ちが表れている。女性のどの年代でも高く、本当はこうありたい子育て・生き方のヒントがあるのではないだろうか。

この因子に強く肯定する人は、子どもイメージに対して「子どものチカラ」に肯定する傾向がある。妊娠・出産については、「妊娠・出産に主体的」に肯定する傾向がある。子育て・生き方については、「自分らしく生きたい」に肯定する傾向がある。しかし、「パートナーへの不満と諦め」や「育児の悪循環」も感じており、現実育児の疲れを抱えている。「今どきの子育て」も気になっている。「体罰容認」の「43-叩いても愛情は伝わる」に肯定傾向が見られることから、子どもを叩かざるを得ない状況におかれ葛藤している女性たちの姿がうかがえる。

設問E)のエピソード質問との関係を見てみると、「親の責任追及」には否定傾向だが、「世間体重視」には少ないが肯定もあり、どうしても人の目を気にしてしまう、世間体を捨て切れない葛藤も見える。「地域で支える子育て」と「虐待は社会全体で考えること」には肯定傾向があり、「子育ては親の責任」にはどちらかという否定的である。こうした結果からも、第1因子は、みんなで子育てしていこう、していきたいという気持ちがうかがえる。

第4因子「今どきの子育て」に注目

(別添 グラフ10 参照)

年代比較グラフをみると、最も年代で差が開いた因子である。若い年代が得点が高く、年代順に得点が下がっている傾向があることから、「今どきの子育て」と言えよう。

うまく楽に子育てをしたくて、仲間を作ったり、いろんな情報を得たりしているが、実は、いろんな情報(雑誌、テレビ、インターネット、ママ話など)に振り回されて苦しくなっているのではないだろうか。そう感じたのは、他7つの因子の中で、最も第2因子「育児の悪循環」と相関しているからである。今どきのやり方で楽しんでいるはずなのに、子育て中のイ

ライラを強く感じている。

話し合いの中で、「育児の悪循環」を感じてきた親(団塊)年代に対し、そうはならないぞ!と「今どきの育児」を楽しんでいるつもりが、実は「今どきの、楽しくやらなくちゃいけない育児」に縛られていることに、気づいた母親がいた。すごい発見だ。今どきの育児の苦しさはそこにある。自分が縛られていると言うことは、子どももある枠で縛っている可能性があり、それが、子どもイメージでの答え方ではっきり出てきた。

この因子に強い肯定傾向がある人は、子どもイメージに「好奇心」「元気が無い傾向があった。」「しつこい」「わがまま」「手がかかる」と思う傾向が強い。周りから入ってくる様々な情報から、いわゆる「いい子像」イメージを強く持っていて、それとギャップのある現実のわが子に、「子育ての大変」や「こどものここがイヤ」を強く感じてしまう。本来の子どもの姿を捉えられない、知らず知らずのうちに子どもを人形のように捉えてしまう危険があるのではないか。

妊娠・出産についてみると「当然と思われていること」に目立った肯定傾向がある。次いで、「子どもの障害は親の責任」に肯定傾向がある。その因子の中でも「20 子どもを産んでいない人には育児の大変さはわからない」は強く肯定していて、自分と同じ大変さを体験している相手と対話したい、つまりは「45 子育ての苦労を共感できるママ友がいないとつらい」に繋がるのではないだろうか。

エピソード質問を見てみると、「子どもの気持ちを尊重」や「地域で支える子育て」よりも「世間体重視」に肯定傾向がある。これは、周りからの縛りに合う結果、自分や自分の子供が枠からはみ出ないことが優先される。すると自分や子供に厳しくなり、自分の親としての責任も感じやすくなる。更には、その感覚が他者へも投影されるという結果が「親の責任追及」への肯定傾向に表れているのではないか。

「今どきの育児」を考えると、私たちが「消費社会」にいることを考えずにはいられない。妊娠・出産・育児とあらゆる段階で、「妊娠したらこれが必要です、出産にはこれだけ揃えれば安心、0歳児にはこれが便利、1歳児にはこれ、2歳になったら……」と様々な商品が年々増えてはいないだろうか? 不要なものまで、買わされていないだろうか。

初めての育児に不安や孤独を感じる私たちは、とりあえず、商品を揃えることで、安心する。しかし、“商品”では本当の孤独や不安は解消されない。「ママ友」もその商品と同じレベルになっていないだろうか。携帯電話のアドレス帳にママ友がいることで安心する。自分と同じ気持ちを知っている

ことで安心する。でも、それだけでは、本質的なところは解消されていないから、育児のライラが減らない。友達が多く、付き合いが多いママほど消費が増えるというマーケティングサーチがある。企業にとっては格好のマーケットかもしれないが、その“消費”は不安や孤独、寂しさを紛らわすだけにすぎない。“消費”で、孤独や不安をカモフラージュされていないか。本当はどこか孤独を感じている、にもかかわらず、自覚できていない私たちなのではないだろうか。でも、そうやって、不安や孤独を紛らわさないとやっていけない現状もある。その不安や孤独感はどこからくるのか。

この因子「今どきの子育て」は、子どもイメージが“いい子像”に傾いていること、親としての責任を感じやすいこと、世間体重視なこと、から、「子育てはこうでなくてはいけない、それができないのは私の責任」と思いこみが強そうだ。第5因子「一人で背負う子育て」にも関連していることから、いろいろ楽しもうとしているが、実は自分の殻に閉じこもりがちなのかもしれない。

しかし、第1因子「みんなで子育て」、第3因子「私らしく生きたい」、第8因子「子どもの存在が嬉しい」にも関連があるから、自分の気持ちを大切にしながら、周りとの関係も持ちつつ、子どもとより良い関係作りをするにはどうしたらいいかを探っている感じがする。どうしたらいいかを探っているとき、目の前にあったのが、消費社会の中の「今どきの育児」だった。

第5因子「一人で背負う子育て」に注目

(別添 グラフ 11 参照)

この因子は、「13 子どもがいたら、子どもを最優先にして、自分のやりたことは我慢すべき」という質問が最も代表的なものとなっている。「53 パートナーとは波風たたないように暮らすほうがいい」という質問もあり、育児や家庭生活において、自分さえ我慢すればよいと、自分を犠牲にしていることがわかる。そして、「10 子育ては私事……」「27 母親なら子どものことをなんでもわかっているはず」「52 自分がいなければ子どもは生きていけない」と、自分の責任を強く感じている。責任を感じるがゆえに、トラブルは起こしたくないので、外部との関係を持ちにくい状況に陥っているのではないだろうか。自分の中でなんとかしようとする“囲い込み育児”になりやすいともいえる。

話し合いの中で、「社会から孤立している感じで、つらい感じ」と発言があったが、こういう状況でしか過ごすことができない、あるいは、そうすることで自分自身を守っている母親たちもいるのではないか。そういう気持ちが実は自分たちに

もあるな、とみんなと話し合う中で、気づいた。

この因子に強く肯定する人の子どもイメージはどうか。全体的に、子どもに対するイメージがないことがわかった。「子どものチカラ」、「子どものここがイヤ」も、どちらも、当てはまるイメージがないようである。第1因子「みんなで子育て」に強い肯定傾向のあるグループが多くのイメージを持っているのと、反対の結果である。話し合いでは「子どもらしさが出ないように育てているのかも。子どもらしさを押さえつけている感じがする」と話した。

第6因子「体罰容認」に肯定傾向が出ていて、子どもを厳しくしつける傾向があるとことにも、子どもを押さえつける感じが読み取れる。エピソード質問を見てみると、「親の責任追及」に肯定傾向があり、虐待については関心が無いように読み取れる。しかし、「体罰容認」傾向があるので、知らず知らずのうちに虐待をしている傾向があることを否定できない。

第4因子「今どきの子育て」に関心があると読み取れる。「今どき」=「人並み」という枠から外れないように、一人で何とかしようとしているように見える。

妊娠・出産の質問では、「当然と思われていること」「子どもの障害は親の責任」に肯定傾向がはっきり現れていて、これは第4因子「今どきの子育て」と共通している。最も肯定傾向があるのは「19 陣痛に耐えてこそ母親になれる」であり、ここでも、「自分が我慢すれば」という気持ちが強く表れているといえる。

そして、第2因子「育児の悪循環」への肯定傾向もあり、育児中の疲れも感じている。

第2因子「育児の悪循環」と第4因子「今どきの子育て」と第7因子「夫への不満と諦め」の相関因子分析すると、因子同士の相関の度合いを表す行列(因子相関行列)が算出される。それをみると、第2因子「子育ての悪循環」は第7因子「夫への不満と諦め」に強めの相関があり、次いで第4因子「今どきの子育て」に相関がある。第2因子「育児の悪循環」は、母親一人で頑張っている、疲れとイライラが溜まっている感じがする。協力して欲しいのに思うように協力を得られない夫への不満が募り、その解消先が、第4因子「今どきの子育て」の「ママ友」付き合いや流行への“消費”となっている感じがする。この3つの因子の関係には、「育児は女性の仕事」という意識が女性の中にも根強く潜んでいることが感じられる。「育児は私がしなくては、夫に迷惑かけてはいけない」、そういう思いの表れではないだろうか。

E) エピソード質問との関係から見えること

エピソード質問の因子との関係から、8 因子が大きく二つの傾向に分かれることが見えてきた。前述の因子相関行列にもその傾向が見えるものの、はっきりしない。エピソードの因子との関係から、よりはっきりしたものが見えてきた。

(別添 グラフ12、13 参照)

< エピソード質問の因子 >

エピソード1 「子ども同士のトラブル」の因子

第1因子 子どもの気持ち尊重

第2因子 親の責任追及

第3因子 親としての望み

第4因子 世間体重視

エピソード2 「地域の子どもとの関わり」

第1因子 地域社会で支える子育て

第2因子 子育ては親の責任

第3因子 虐待は社会全体で考えること

第1因子「みんなで子育て」と第3因子「私らしく生きたい」と第8因子「子どもの存在が嬉しい」に強い肯定傾向のある人は、「子どもの気持ち尊重」と「地域社会で支える子育て」にも強い肯定傾向がある。そして、「親の責任追及」「子育ては親の責任」に否定傾向。

このグループと反対の傾向にあるのが、第2因子「育児の悪循環」、第4因子「今どきの子育て」、第5因子「一人で背負う子育て」、第6因子「体罰容認」、第7因子「夫への不満と諦め」のグループである。「子どもの気持ち尊重」と「地域社会で支える子育て」に肯定がごく少なく、「親の責任追及」「子育ては親の責任」に肯定傾向がある。この結果から読み取れることは、「体罰容認」に肯定する人と回答傾向が似ていることから、このグループは、無意識のうちにも虐待に陥りやすい傾向を持っているということではなからうか。

因子	個々に責任を押し付けるのではなく、お互いに支え合いたい
因子	「体罰容認」傾向 虐待の危険

まとめ

これまでの分析から、自分がどうしたいのか、目の前にいる相手がどうしたいかよりも、昔からある社会通念や、周りから与えられたものによって、自分も相手も判断し、合わないものは排除してしまいがちな私たちがいることが見えてきた。第1因子「みんなで子育て」で、理想的とも言える子育て・生き方が見えてきたが、そうなりきれない現状がある。第4因子「今どきの子育て」からは、実は苦しくなって子育てし

ている私たちが見えてきた。

育児で苦勞を感じているとき、一見、子どもに原因があるように思えて、なんだかうまくいかないイライラが子どもに向いてしまう。そこには虐待の危険性が潜んでいる。本当の原因は「主体的に生きられないでいる」自分自身にあるのではないか。自分の気持ちを周囲に理解してもらえなかったり、自分自身で決められなかったり。しかし、人生のどのタイミングでも自分外の評価軸で判断され自分もそうしてきた私たち。「あなたは、どうしたいの？」と問われることもなく、自分自身でもその問いに蓋をしてきたのではないだろうか。本当は自分がどうしたいのか、自分でもわからなくなっている私たちがいるようだ。

子育ての苦勞は子育てにあらず。自分がどうしたいかを本気で考えるときが来た！

私たちと一緒に考え、見つけていきましょう。